

岐阜新聞社 杉山幹夫最高顧問に聞く

「軽薄短小、経営を貫き生き残る」



杉山 幹夫(すぎやま・みきお)昭和2(1927)年7月、岐阜県生まれ。現岐阜大学農学部卒業後岐阜タイムス社(現岐阜新聞社)入社。昭和46(71)年に岐阜日日新聞社長、岐阜放送社長。平成16(2004)年に岐阜新聞社会長、岐阜放送会長に就任。平成30(2018)年岐阜新聞社最高顧問。中国杭州市榮譽市民、勲三等旭日中授賞、中日友好貢献賞、岐阜市民榮譽賞など受賞。生れ育った羽島郡笠松町の「名誉町民」。

創刊141年と、国内屈指の歴史を誇る岐阜新聞社(岐阜市今小町10)。その代表取締役社長、同会長を歴任し、現在最高顧問の杉山幹夫さん(95)は地域とともに歩む一方、岐阜県日中友好協会会長も務め、国際交流への貢献も重ねてきた。新聞の歴史、課題や交流への思いを語ってもらった。

(聞き手は塚本隆編集長)

塚本 経営者として印象的なことをお聞かせください。

杉山最高顧問 昭和50(1975)年に、名古屋に進出した中部読売新聞が月の購読料500円で、発行した時は、驚きました。『コーヒー2杯分で新聞が読める』とPRされた。新聞は特例的な措置により、各社とも10円程度の差はあっても、ほぼ同じ。当時の読売新聞本紙は月額930円でした。通常価格の半額の新聞が名古屋圏に誕生したのです。

——どう対応されましたか。

杉山 その年の1月、日本新聞協会の理事会ですべての議案が終了しかかったとき、発言を求めました。当時の協会会長は京都新聞の白石古京社長で、許されたので、名古屋中心にPRしている格安新聞について「新聞は特種指定で守られてきた。ほぼ同じ価格で円満にやってきたが、『コーヒー2杯分、はいかがなものか』と指摘。「名古屋だけの問題ではなく、岐阜はもちろん大変だが、全国に波及しかねない」と口火を切ったら静岡新聞など数社が「許されな

い」と指摘した。読売新聞は中部読売は別会社と言い、白石会長も断言されなかった。

——そしてどうなりましたか。

杉山 岐阜新聞はつぶれるかもしれない、と思いましたね、その時は。なぜなら、こういう時は部数が少ないところからつぶれていくからです。しかし、この時、わが社の販売店が『天下の一大事、代々続けてきた遺産を残さねば』と結束しましたね。中日新聞とも連携を密にして、友人でもある大島宏彦中日新聞最高顧問が当時いたワシントンから呼び戻されて販売を担当し、岐阜にも来て、販売対策を練ったものです。全国紙とも協力して、大安売りを食い止めました。この時、発行本社と販売店の絆の強さを感じ、以降相互の信頼感を深めております。

——平成29(2017)年10月、御紙は夕刊を休刊しました。

杉山 実を言いますと、その10年ほど前に現場から夕刊の発行をやめたらどうかという進言がありました。当時私は朝夕刊セット紙が世間に認められた新聞、主読紙だと思っていまし